

より漸次藤原氏の好尚に適應せるの風俗と醇化し、爾後數百年間公武風俗の基礎となりしなり。

終に臨み本稿を草するに當り、第三高等學校教授文學士林森太郎先生、京都繪畫專門學校講師猪熊淺磨先生、文學士西脇豐造氏に負ふ所多し。謹みて謝す。

## 日本に於ける北辰北斗の

### 信仰

文學士 清原貞雄

天然物中天體殊に日月星辰の信仰は、殆んどあらゆる——文明の程度低き——社會に行はれたるが如く、殊に星占術等の發達せる印度支那或は埃及等に盛なりしが如し。

日本に於ても日月の崇拜は、明に存したるものな

れども、獨り星の崇拜は、其有無明ならず。古事記日本書紀に現はれたる神話を探すも星に關する神は、殆んど發見せられず。唯、一つ星神香々背男、一名天津鸞星の名あれども、崇拜せられたる形迹を認めず。猶又、延暦二十三年勅命を奉じて神宮より出したる皇太神宮儀式帳に、天須婆留女命なる神に關係ある神社あり。即ち皇太神宮の末社、江の神社・榛原社・狹田神社にして江神社は須婆留女命、他の二社は其子を祭れるものとせらる是等は延喜の神名帳にも見わたるものなり。此須婆留女命は記紀に見わざる神なるが、從來の學者の説にては、昴星、國語にて所謂「スバル」又は「スマル」といふ星なりといふ。若し之が果して學者の説の如くならば、星の信仰に關する興味ある材料なれども、此須婆留女命に關しては、他に何等の手掛なく又學者の説また首肯するに足らず。然るに後世に至りては、星の信仰は、日本の信仰

殊に俗間の信仰としては、最も重要なる地位を占む、云ふまでもなく、是れ支那及び印度の思想を傳へたるものなり。詳言すれば支那の五行讖緯の思想及び佛教、殊に眞言宗敎の思想を承繼せるものにして、其最も著しきは、七月七日の牽牛星織女星の祭なり。是は奈良朝時代に既に一般に民間までも行はれたる信仰なり。又類聚國史に、天武天皇十年五月己巳(十五日)に、星を祭るといふ事見ゆ。之は如何なる星を祭れるものか明ならざるも、兎

に角一種の星祭に相違なく、唯五月なるより牽牛織女の祭にはあらざるべし。其外には陰陽道に關係せる祭には多くの星祭あり。北斗七星、七十二星、歳星、計都星、老人星、太白星等にして其他大將軍、土公、太一等も實際は星に關係あるものにして、其内最も旺に行はれたるは、北極星、北斗星、老人星、土公、太白、螢惑、天一、大將軍等なり。就中、北斗、大將軍等は陰陽道の専門家

によりて其祭行はれたるのみならず、一般の信仰となり、特に大將軍は、神社となれるあり。例へば皇城鎮護の意味を以て京都の四方に祭られたるもの、即ち南方は藤森社の中にある大將軍社、東は元南禪寺の前にありし大將軍社、北は大徳寺の門前にありし大將軍社、西は紙屋川の東方にある大將軍社の如き是なり。猶諸國にもあり。是等につきては今述べず。茲には北辰及び北斗につきて畧述せんと欲す。

支那にて辰の字源の研究は暫く措き、信仰上北辰を如何に見たるかといふに、爾雅釋天には北極是を北辰といふとありて、註には北極は天の中以て四時を正す、其天の中に居るを以て是を北極といふ。と見ゆ。其外史記天官書、漢書天文志、晉書天文志以下諸書、北辰の記事多くは大同小異なり其要點を云へば、北極五星の中、北辰を以て最も貴しとす。辰は即ち總にして、他の諸星は回轉す

るに、獨り北辰は天の中樞に位して、更に動かす他の諸星を總を以て繋ぎ、制禦するが如きものなり、といふにあり。

斯く北辰は、天の中央に位し、最も貴き星なりとせられたるが故に、自然北辰に對する祭も早くより現はれたり。漢書郊祀志平帝の元始五年の條に北辰を祭る事見ゆ、其後代々此事あり。

一方佛教の方にてても、亦北辰は盛に崇拜せらる。佛教にては北極星は妙見菩薩として現はれ、諸星の中の星王なるより是を尊星王と稱し、又北辰尊星妙見大菩薩といふ。七佛所說神呪經に、

我北辰菩薩名曰妙見菩薩、今欲下說神呪一擁中護諸國土、處於閻浮提、所作甚奇特、故名曰妙見、衆生中最勝、神仙中之仙、菩薩之大將、廣濟諸群生、

とあるもの其功德なり。佛教中にてても、主として眞言にて祭るものにして、其祭を行ふを妙見菩薩

供又は尊星供と稱す。其作法は前述の神呪經(縮刷大藏經祕密部成秩)を本據とし、又我台密の作法は阿婆縛抄百四十四に見ゆ、東密の作法は覺禪抄(何れも大日本佛教全書に出)に見わたるも今是を述べず。

此北辰即ち北極星の信仰が、我國史に事實の上に現はれたるは、延暦十五年三月庚戌の日に、詔を下して北辰を祭る事を禁じたる(日本紀畧、類聚國史)を以て初見となす。次で同十八年十月及び弘仁二年九月何れも伊勢の齋王が伊勢齋宮入御の日に京都附近の百姓が北辰を祭る事を禁ずるの令あり。類聚國史に見わたる延暦十五年三月庚戌の禁令を見るに、朝廷に於て是を禁止する事久しきにも拘らず、官吏侮つて更に禁止を事とせず、今や京畿の吏民等、春秋毎に職を棄て業を忘れ相集りて男女混淆、事潔清を没却して殃を招き神罰を蒙る者あり、爾今以後是を嚴禁す。といふにあり

是に依れば、北辰を祭る事は既に一般の風俗となり、而も進んで其弊害まで醸し居りし事を見るべし。其後延喜式を見るに、是に關する制度を定め齋主が齋宮に入御の時は、九月一日より三十日迄京畿内の國に伊勢近江等其順路に當る國々にては北辰を祭る事を嚴禁したり。(卷五神祇齋宮)

此北辰祭又は北辰燈なるものは、佛敎に關係せるものにして、江次第抄に引ける延喜二年三月二日の御記に、

内藏寮請<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>定<sub>下</sub>可<sub>レ</sub>奉<sub>ニ</sub>御燈<sub>ニ</sub>寺<sub>上</sub>、依<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>慥、舊例召<sub>ニ</sub>右大將聞<sub>レ</sub>之、奏曰、貞觀以來於<sub>ニ</sub>靈岩寺<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>奉、寬平用<sub>ニ</sub>月林寺<sub>一</sub>、後用<sub>ニ</sub>圓成寺<sub>一</sub>、故因<sub>ニ</sub>舊例<sub>一</sub>、於<sub>ニ</sub>靈岩寺<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>奉狀仰畢、

とあり。是に依るも、明かに佛法に關したるものなり。此靈巖寺は今昔物語などに、妙見の出現せる緣起によりて造られたりとの傳説の殘れる寺にして、拾芥抄にも靈巖寺は一名妙見寺と稱し、同

じ寺が、元、王城の四方にありし由見ゆ。

朝野群載にある天永四年の北辰祭文を見るに、北辰は萬王の曆數を司り、天下の興滅を主り、光を玄宮に施し、人々の善惡を照すものなり、今即ち天羅、地魍、厭魅、呪咀、夢想、恠異等のすべての不祥を未然に退け、長生を保たしめよ、といふにあり。尊星王法も亦同じく北辰を祭るものにして、朝野群載にある康和五年の祭文を見るに、前に述べたる七佛所謂神呪經と同一の意味を以て其德を稱へ、天地の變異を消し、内外の不祥を祓ふ事を祈ることあり。畢竟神呪經を取りたるものにして是等に依りて佛敎の方より來る北極星の祭の考を大體窺ふ事を得べし。此信仰は日本の神道にも影響を及ぼし、北辰社又は妙見社其他種々の名稱の神社となりて廣く信仰せらるゝに至れり。此妙見社は元來北極星より起りたるものなるも、後に述ぶる北斗星とも關係あるが故に、此妙見社の信

仰につきては、北斗星の事を述べたる後畧説する所あるべし。

此北極星、即ち北辰は、佛敎のみならず陰陽道の方より來れる信仰も盛に行はれたり。侍中群要七御祭事の條に玄宮北極有部狀と見え、伊呂波字類抄にも玄宮北極三日忌籠以御饗祭之御精進等あるもの即ち是なり。玄宮の玄の字は黒の義にして支那の五行思想にては總てのもの皆五色と結びつけらる。方角にて云へば、南は赤、西は白、北は黒、

東は青、中央は黄、又春夏秋冬にて云へば、春は青、夏は赤、秋は白、冬は黒、四時は黄と定めたる如きは誰も知る所にして、北極星を黒き宮即ち玄宮としたるも此五行の思想より來れるなり。緯書孝經援神契に

孔子制作孝經使七十二子向北辰磬折上

等見ゆ。日本にて陰陽道の方にて祭りし北辰は是等の緯説より系統を引けるものなるべし。

平安朝の末の種々の記録、中右記、山槐記、吉記などを見るに色々の御祈のため、例へば病氣天變地異の場合に此玄宮北極祭を盛に行へるを見る。多くは陰陽師の名を以て、加茂、安倍等の陰陽家の手に行はる。今一々の例は畧す。

次には北斗七星なり。支那にては此七星の名を天樞、玉旋、玉璣、權、玉衡、開陽、搖光といふ。而して是を天子の七政に譬へたり。有名なる緯書春秋運斗樞に

北斗有七星天子有七政也、

と見え、五行大義卷十六論七政には

北斗爲七星者北斗天樞也、天有七紀斗有七

星虞錄云、北斗七星據璇璣玉衡以齊七政、

と見む其他史記天官書、漢書天文志以下に北斗七星に關して大同小異の説多く掲げられたるも今一々擧げず。而して北斗七星の祭を行ふ事も比較的、古く史記天官書に秦の時代に北斗を祭りし事を載

せ、漢書後漢書以下北斗の祭の事は引き續き見ねたり。

佛敎の方にも亦北斗七星の崇拜あり。是も主として眞言にて祭るものにして其功德を述べたる經典多し。其主なるものを擧ぐれば北斗七星護摩祕要儀軌、北斗七星念誦儀軌、七星如意輪祕要經、北斗七星護摩法、北斗七星延命經等なり。北斗七星護摩祕要儀軌によれば、北斗七星は日月五星の精にして七曜を總括し八方に照臨し上天神に輝き下は人間に亘りて以て善惡を司り禍福を分つ、群星の朝宗する所、萬靈の俯仰する所、若人ありて能く禮拜供養すれば長壽富貴なり、信敬せざるものは運命久しからずとあり。此經文は支那の大興善寺の灌頂阿闍梨の書けるものにして此經の中には支那の道家の説等も確に混入せり。例へば庚申三戸の説の如きは是なり。然れども前掲の功德の思想は必ずしも支那のものにあらざるべし。

北斗七星念誦儀軌には、若し人ありて毎日此神呪を誦すれば決定の罪業を除滅し一切の願求を成就す、若又人ありて能く毎日此神呪を誦する事一百八遍すれば即、自身及一切眷屬擁護を得。五百遍すれば大威力五百由旬内に普く一切の惡魔近かすことあり。此儀軌によりて修法を行ふを北斗供と稱す。朝野群載に康和三年の北斗御修法祭文あり。是に依れば其功德は全然前述の祕要儀軌に據れるを見る。

是を行ふは東密、台密にては勿論盛に行ひしが、三井寺のものも亦有名なり。常陸國新治郡栗原村の北斗寺の如き亦有名なり。又洛東六道の東に北斗堂の跡なる所あり。北斗信仰に關係あるものにして謠曲熊野に「北斗の星のくもりなき御法の花も開くなる經書堂は是かごよ」とあるものは是なり。斯く佛敎の方にも北斗の信仰あれど日本にて行は

れたる北斗の信仰は所謂「屬星」といふ事にて最も廣く普及せるものなり。

是も元は佛敎の方より來れるものにして佛敎にて北斗七星を貪狼星、巨門星、祿存星、文曲星、廉貞星、武曲星、破軍星といふ。人間は其生年に緣りて此七星の中の何れかに所屬すといふにあり。其本據は佛説北斗七星延命經にして是に依れば子年生の人は貪狼星、丑年亥年は巨門、寅年戌年は祿存、酉年は文曲、巳年未年は武曲、午年は破軍、辰年申年は廉貞星に屬すといふ。此延命經は婆羅門僧正の所述にして此人は印度に生れ支那より日本に來れる人なるが故に恐らくは支那の讖緯説を採れるものなるべし。支那の方にも例の五行大義十六論七政に引ける黃帝牛圖なるものに是と同じ思想あり。又天地瑞祥志にも其屬星を祈る時は一切の困難皆消失すと見ゆ。

日本に於て此信仰を承繼せるものが所謂屬星祭な

り。此屬星祭を行ふに日本にては二様の形式に依る。一は正月元日に行はるる四方拜にして其中に屬星を拜する儀あり。他は四方拜と關係なき屬星祭なり。

此四方拜は、何時頃より始まれるやは詳ならざるも、江次第抄、公事根源には、皇極天皇元年八月朔日に天皇南淵河上に幸して跪いて四方を拜すといふ日本書紀の文を引きて是が四方拜の濫觴なりとせり。然れども是は恐らく後世屬星を拜したる四方拜とは何等の關係あらざるべし同じく江次第抄には寛平二年御記に正月の朔日四方拜の事ありと記し、公事根源には寛平元年に此事ありと記せり。寛平御記の元年及び二年の正月元旦の條は今存せざるが故に何れが正しきや判然せざるも兎に角此頃は既に四方拜なるもの行はれ居りしものなるべし。其前の弘仁の内禊式には勿論、貞觀儀式にも元旦の四方拜屬星といふ事見えず其他の記録

にも徴すべきものなきが如し。故に元旦に屬星を拜する事の始まれるは此寛平を去る事遠からざるべし。其後の延喜式掃部寮を見るに

元旦平旦設<sub>下</sub>奉<sub>レ</sub>拜<sub>二</sub>天地四方<sub>一</sub>御座<sub>上</sub>前庭鋪<sub>二</sub>長筵<sub>一</sub>  
立<sub>二</sub>御屏風<sub>一</sub>之所敷<sub>二</sub>平帖<sub>一</sub>元正前一日設<sub>二</sub>御座於<sub>一</sub>  
大極殿高御座……

とありて別に屬星といふ事見わざるも恐らく後世の元旦の四方拜と同じものありしならん。此頃既に恒例として四方拜を行ひ居りし事は日本紀畧延喜七年正月一日の條に寅刻天子拜<sub>二</sub>四方<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>常とあり又是より先き延喜三年の條に正月一日癸卯不<sub>レ</sub>拜と記して、四方拜の行はれざりし事を異例として特筆せるを見ても察知すべし。

其屬星を拜する儀式は、大晦日に追儺の儀式終れる後、雞鳴の頃より清涼殿の東庭に屏風を立て三所の御座を設け、其一を屬星を拜する座とし一を天地を拜する座とし一を御陵を拜する座とす。茲

に香を燒き華を置き灯を燃して北方に向て屬星の名を唱ふる事七遍、再拜して呪文を唱ふ。其詳しき事は、西宮記、江家次第等に見ゆれど茲には畧しぬ。其呪文なるものも一定の形式あり。内裡儀式江家次第に見ゆる所によりて其大畧を云へば、賊寇毒魔を免れ萬病悉く癒えて欲する所意のまゝなるべしといふにあり。此四方拜の屬星祈禱は此後も絶えず行はれ單に朝廷のみならず一般の庶人も亦是を行へる事は江家次第等に見わたるが如し。平安朝の末よりは院中に於ても是を行へる事は其時代の記録に多く散見す。

次に元旦四方拜と關係なく單獨に屬星に祈りし事も比較的古きものにして真信公記の延喜三年三月十九日の條に屬星祭を行へる記事あり。又承平二年七月十六日の條にも

内裡屬星祭、惟香奉仕、拜<sub>二</sub>第二星<sub>一</sub>間星降者と見ゆ。惟香は陰陽師なり。又九條殿御遺誠にも

先起稱三屬星名號二七遍、微音

と見ゆ、其他侍中群要七、にも御屬星籠、又大屬星御祭五箇日齋籠精進、屬星御祭三日齋籠精進、等見ゆ、又伊呂波字類抄の中にも出づ。今昔物語二十四に、天文博士弓削是雄なる人、近江國勢田の驛に於て某に請せられて大屬星を祈りし物語あり。此種の屬星祭は平安朝の末より鎌倉時代にかけて最も盛に行はれたるものなり。又別に本命祭あり、屬星祭と其趣意を同じくし前掲の北斗七星延命經を本據とするものにして人は十二支中の何れの年に生れたるものは七星中の何に屬すと定まり。従つて其運命は生れると共に、自ら定まれりといふにあり。例へば子年生れの人は貪狼星の下に屬するものにして、もし此經即ち延命經を供養し本星の符を帶する時は運命吉なる事を得といふにあり。其他の六星につきても皆類似的の説あるなり。此符なるものを見るも前述の如く此延命經が支那道家の思想

を取りて出來居る事を知るべし。此星を供養して災を除き福を求むるを本命星供といひ其本命星供を修する所を本命道場といふ。神皇正統記嵯峨天皇の條に「比叡山には顯密ならび紹隆す、殊に天子本命の道場をたて、御願をいのる地なり」などあるもの即ち是なり。

然るに是は密教にて行ふのみにあらず、寧ろ陰陽家の方にて盛に本命祭を行へり。

延喜式陰陽寮式に御本命祭、神座廿五前、毎年六度とあるものは是なり、此二十五前とあるは何々の神を祭れるか未だ考ね得ず、本命といふ語は猶是よりさきに三代實錄貞觀七年八月二十一日の條陰陽寮言上の中に

天子御本命庚午、是年御絶命在<sub>レ</sub>乾、

等見たり。只本命祭なる語の見ねたるは延喜式を初見とす。其他記録の方にては眞信公記延喜二十年十一月三日庚子の條、延長二年五月三日(庚

子)同三年三月八日庚子の條等に本命祭の事見ゆ。此貞信公記に依れば悉く庚子の日に行はれたり。貞信公即ち藤原忠平は文慶四年即庚子の年に生れたる人なれば是に依りて考ふれば本命祭は其生年と同一干支の日を以て是を行ふものなるが如し。此事につきては拾芥抄には本命は生年を以て定むる説と生日を以て定むる説との二説ある由を記せり。然るに此貞信公記によりて年を以て定むる事古くよりありしを知るなり。此外伊呂波字類抄の中にも本命祭の名見ゆ。

要するに屬星、本命星又或場合には當年の星(此名は中右記永久二年正月十四日條後撰和歌集(註)等に見わたり)等稱するは實際は皆同じものなり。此信仰は後世まで廣く民間に行はれたるものなり。最後に北辰北斗の信仰が神道に影響し居る事は看過す可らず。北辰北斗の信仰より起れる寺の存する事は怪むに足らざるも、此信仰が神道に入り來

り神社として現はれたる事は信仰史上興味ある現象なり。

此種の神社には種々の名目あり。妙見社、北辰社、北辰明神、北斗の社、星の神社、星宮、七星明神、明現等其主なるものなり。身延山七面明神の如きも北斗七星を崇めて法華守護の伽藍神として起たるものなりとの傳説あり。但し一説には日枝の七社より採れりとの説もあり。又佛教の方より説ける説もありて詳ならず。其他名目の上に現はれずして而も古、星の信仰に關係ありしものもあり。例へば石清水八幡宮の竈殿の如きは宮寺縁事抄(第一卷)に是を解して宇佐に祝へる七星を勸請せるものならんとせり。下總國千葉神社の如きも(現今は祭神天御中主神)佐倉風土記に依れば、往古是を妙見尊星王又は妙見大菩薩と稱したりといひ、關八州古戦録には上總の相馬家にては先祖以來星の宮を氏神としたるものが此神社の起りなりと見

なり。

其分布をいふ時は、北は北海道より西九州の端まで行はれ就中九州地方は此信仰盛なりしが如し。其始まれる年代は元より詳ならず。其比較的早くより文献に見わたるもの一二を擧ぐれば、宇佐の北辰社は宇佐宮記に引ける官符なるものを見るに文治二年宇佐實檢使平基親が北辰殿の正體を云々したりといふ事見ゆ。由來宇佐神宮に關する文献には僞物多きが故に此官符も眞僞俄に判し難きも前掲宮寺縁事抄の文を見るときは少くとも鎌倉の初期以前より宇佐の北辰社の存したる事は明かなり。次に筑前早良郡飯盛妙見社は太宰府管内志に引ける飯盛社文書なるものに從へば文永頃の記事あり。其外に豊後大分郡星嶽の妙見社、筑後生葉郡の妙見其他のものにて、平安朝初期又は中葉に其縁起を求めたるもの許多あれど元より信用すべき史料無し。要するに此種の神社の始まりは詳な

らざるも、大體神佛混淆の漸く熟したる平安朝の末期に始まり鎌倉の初期にかけて漸く擴がりしものと見るを穩當とすべし。猶此事につきては詳細に研究せざる可らず。

最後に一言附加すべきは、北辰と北斗との混同なり。此二者元より同一にあらざるに、一般に混同せられたる傾向あり、例へば北斗七星を祭りて妙見社と稱し、妙見社の所在地を七星の森等稱したる如きはなり。此混同の原因は只不用意の間に漫然混同せる事もあるべけれども、又考ね方によりては全く據る所なきにあらず。即ち密宗に北辰といへば無論北極星、妙見も亦同一なるも又北斗星に繋ぐる特別の場合あり。三井寺にては北斗の主星を北辰といひ、是を尊星又は妙見大菩薩となす。即ち北斗といふ時は七星の事にして尊星又は妙見といへば其七星を總稱せる總括的名目なりといふ一種特別の解釋を下せり。即ち同一物を見方を

異にするに過ぎずといふにあり(祕密辭林)。大傳  
法院頼瑜僧正の薄草子口訣に妙見法と北斗法とは  
開合の不同なり。合する時は妙見といひ、開く時  
は北斗といふ、妙見色々の利益方便の時に七星と  
顯るゝが故に、妙見、七星を持す等あるは即ち是  
なり。是等の事も一般信仰に北斗北辰を混同せる  
原因となれるなるべし。此事につきては猶研究を  
要すべし。(完)

## 「南洋」の意義

文學士 内田 寛 一

南洋(南海)なる語は從來邦人に膾炙せられてゐ  
たが、特に昨秋我が海軍の活動以來は、南洋熱一  
層高まり、新聞に雜誌に喧傳せらるゝ南洋の記事  
は、實に應接に遑なからんとする盛況を呈し、今

や「南洋」は一種の流行語となつた。然し此語の意  
義が甚だ明瞭を缺ける爲めに、不便を感ずる事少  
からざるは、實に余輩のみに止るまいと思はれる  
近時我國では、南洋なる語で指示せられた記事  
の多くが、東南亞細亞馬來多島海地方を意味して  
居つた所から、南洋といへば直に此地方を聯想せ  
しむるまでに、南洋なる語と此地方とが密接に結  
び付けられてゐるかの觀がある。此故に新占領獨  
逸領ミクロネシアが、南洋として紹介せらるゝや  
此地方も亦馬來多島海地方のそれと、事情を同じ  
くせるものならんとは、蓋多くの人々の間に抱か  
れた想像で、尙現に左様であるやうであるが、其  
誤解である事は喋々を要しない。

然して一方では、更に進んで「南洋」の語義より  
見て、新占領南洋諸島を南洋と呼ぶは、不合理な  
りとする説さへ聞くに至つた。其理由とする所は  
從來吾等が親んだ「南洋」が馬來多島海地方なるが